



静岡県立大学
大学院食品栄養環境科学研究院長
大学院薬食生命科学総合学府長

小林 裕和

インターネットから得られる情報の信憑性はさて置き、「都道府県別統計とランキングで見る県民性」は面白い。静岡県のナンバーワンとして、「Myしずおか日本一」（静岡県庁ホームページ）に掲載されているような農水産物に加えて、「小学生早寝早起き率」、「中学女子卓球部員数」、「中学生地域行事参加率」などが挙げられている。本県は、健康志向・体育会系とも言える。その結果であろうか、本県の健康寿命「世界トップクラス」は、周知の通りである。地政学的に、日本一高い「富士山」と近海として日本一深い「駿河湾」を擁し、このような起伏に富む地形は「茶」や「蜜柑」に代表される豊富な農産物を生み出す。この「地の利」を含む「ふじのくに」において、本学は、1987年に日本で初めて食品と栄養分野を融合し、「食品栄養科学部」を設置した。さらに、2012年に食品・栄養・環境領域と薬学を統合し、日本初「大学院薬食生命科学総合学府」を開設した。本研究院は、「食品栄養科学部」の大学院であり、「大学院薬食生命科学総合学府」の一翼を担う。この間、2002年度文部科学省「21世紀COEプログラム」、さらに2007年度「グローバルCOEプログラム」に採択され、教育研究環境を充実させてきた。その結果、「大学ランキング2013, 2014」（朝日新聞出版）の「農学」分野において全国第一位を獲得し、文部科学省科学研究費助成事業細目別採択件数の「食生活学」分野において、毎年第一位を維持している。

博士号は「足の裏についたご飯粒」と言われる。すなわち、「取らないと気持ち悪いが、取っても食べられない」。日本における大学院博士課程入学者は、2003年をピークに減少傾向に推移し、景気低迷が、博士課程修了者の需要の低下を招いている。ここに至って、博士の社会的意義が問われる。すなわち、国内外の企業が博士課程修了者に求める資質を正確に把握し、大学院学生に習得させなければならない。米国の“Designated Emphasis”を謳う博士学位が参考になる。企業等と大学院教育との間における価値観を共有すべく、国内外の連携企業等から講師を招致して、キャリアパス開発セミナーを開催していきたい。さらに、知識、技術、知性、倫理観等を総合的に評価し、適性を認めた者をインターン候補者として推薦し、最終的に企業等の選考にパスした者に対して、長期インターンシップを実施したい。このような教育体制は、博士前期課程へと適用していきたい。併せて、就職とリンクした奨学金制度も指向する。その結果として、企業や医療福祉系職場でリーダーとなれるような人材の育成を目指す。

地域産業はアウトバウンド展開を指向している。本研究院は、アジア圏を中心にして、多数の留学生を受け入れてきた。また、アジア圏4大学および米国5大学との連携協定の下、共同研究および教員・学生間交流を図ってきた。本研究院は、「食品・栄養・環境」分野の研究と人材育成を介して、健康産業の基盤作りに貢献することを使命とする。